

日本IT書紀

166 議員連盟

09 玉鉤篇
卷之二十三 纏綿

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第百六十六

議員連盟

一

一九六九年一月の時点に戻す。

学生たちが立て籠もっている。上空に取材ヘリが飛び、機動隊のヘルメットが朝の光を受けて輝き、その向こうに安田講堂が聳えている。

前節で筆者がテレビの前に座らせ、

——中継を見ていたであろう。

と想定した人物とは、山岡剛である。

島根県という、全国的にも存在感の薄い土地の、さらに簸川郡佐香村大字三浦という日本海に面した半農半漁の寒村に、一九二五年（大正十四）の十二月二十七日に誕生した。のちに盟友となる構造計画研究所の服部正と何日も違わない。

山岡は自身の少年期を、『わが半生の記・情報産業とともに』（一九九七、産経新聞ニュースサービス）で次のように語っている。

尋常小学校六年のとき、簸川郡十一か町村の連合運動会というのがあった。山を越え、二里を歩いたところにある平田という町で行なわれ、わたしは百メートル走に出場した。練習は裸足だった。運動会では裏にゴムが貼ってあるマラソン足袋のようなものを履いた。ところが他の選手は違っていた。スパイクシューズを見たのはそれが初めてだった。

（原文ママ）

松江中学に進み、このころ松江市の酒蔵の息子竹下登と出会った。四七年、第二早稲田高等学校に入学し、竹下と同じ雑司が谷の学生アパート「長内荘」で住み暮らした。五八年の総選挙で竹下が衆院議員に当選したのがきっかけで、自民党との縁ができた。

東大で四日間にわたって練り広げられた攻防の興奮が冷めやらぬ一月二十八日の朝、その自宅の電話が鳴った。前掲書によると、電話をかけてきたのは竹下登であったという。

このとき竹下は四十四歳で佐藤派若手議員の筆頭、山岡は四十三歳で自ら主宰する電力経済研究所の所長である。前掲書のままに引用すると、電話越しに次のような会話が交わされた。

「すぐに町村会館の木研の部屋に来てくれ。今日、情報議連の発会式をやるんだが、お前さんに事務局をやってもraithたい」

「情報議連ですか。それは一体何をやるんですか」

「くわしいことはあとで話すから、とにかくすぐに来てくれ」

何とも乱暴な話ではあった。

「町村会館」というのは、東京都千代田区平河町の、溜池から半蔵門に抜ける国道二四六沿いに現在もある。正しくは「全国町村会館」という。

その中に「木曜研究会」を名乗る自民党佐藤派の事務所があった。山岡はそこに行ったことがなかったので、タクシーに頼るほかなかった。

部屋には、橋本登美三郎、竹下登、亀岡高夫、小渕恵三、中山太郎の国会議員、それに電子協の秋房義博さんが集まっておられ、当日の発会式の打ち合せしておられました。私は、全く話が解りませんので、ただ黙って様子をうかがっているばかりでした。

間もなく、設立総会の会場であるヒルトン・ホテルに向

いました。今のキャピトル東急ホテルです。

総会は、中山太郎先生の司会で始まり、通産省、電電公社などの人たちが説明されたのですが、正直云って何のこつとやらさっぱり解りません。情報産業などという言葉も初めて耳にしましたし、議連が何をしようとしているのかも皆目見当が付きません。

この日、発足したのは「情報産業振興議員連盟」だった。これが彼の人生の後半を決めるのだが、ただいま現在、設立総会に連れ出されたばかりの彼には、そのようなことは知る由もない。

ただし、

——山岡の自叙伝はいささかバイアスがかかっている。

と指摘する向きもある。

「彼は要するに『食詰め浪人』でしてね。最初、橋本登美三郎さんの『秘書』ということで、自民党の会合に姿を見せていたんです。竹下さんとは同郷だったかもしれないが、彼が接近したのは橋本さんでした」

ところが橋本登美三郎がロッキード事件で逮捕されてしまった。

——それをきっかけに、竹下登に乗り換えた。という。

その話をしてくれたのが誰であるか、氏名を明かすことは憚られる。どうやらこちらの説が正しい、と見ていい。

二

自民党は集金装置として議連を発明した。

小渕恵三が首相になった直後、ある週刊誌が「小渕金脈」を匂わせつつ、

——情報産業振興議員連盟の機関誌であり、山岡剛氏が主催する情報産業研究会が発行する月刊誌『情報化研究』に国産コンピュータ・メーカーから多額の広告料が支払われている。

と報じた。

その額というのは、日本電気が年間四百六十八万円、富士通が四百二十万円、というものだった。

雑誌の広告料としてはごく普通——英語で言うところ「リーズナブル」——であって、取り立てて目くじらを立てるほどの額ではない。日刊紙や他の月刊誌、テレビなどに支払われる広告料と比べれば、微々たる金額なのだが、「その裏で億単位の金が動いていた」という話もある。

真偽のほどは分からない。

表向きであるかもしれないが、この情報産業振興議員連

盟は、直接の資金集めという点ではあまり効果がなかった。発足から三十年以上を経て、情報産業がソフト／ハードの売上高が総額十兆円の規模に達した段階ですら、議員のパッケージ資金の一部をまかなう程度であった。

一九六九年の当時はいかばかりであったか。にもかかわらず、この議連はよく動いた。

もとはといえば、六八年七月七日に行われた、いわゆる参院「七夕選挙」で初当選を果たした中山太郎が持ち込んできた話であった。彼は新人議員として科学技術政策にかかわることを希望していた。中でもコンピュータであった。

地元選挙区・大阪に、科学技術会議の委員である葦原義重がいた。

葦原は一九〇一年（明治三十四）高松市に生まれ、二四年京都帝国大学を卒業して阪神急行電鉄に入った。

電車は電気で走る。

戦時下、電力を統制するために関西配電が設立されるとそこに転じ、終戦後、常務となった。五一年、電力再編にもなつて関西電力が設立されて常務、五九年社長、六六年から関西経済同友会会長。六三年六月に難工事を重ねた黒部第四ダムを完成させ、六八年には福井県若狭湾に美浜原子力発電所の建設に着手していた。

中山が相談に行くと、葦原は言った。

「コンピュータ業界にはIBMというガリバーが君臨して、国産メーカーが単独で挑んでもどうにもこうにもならない。こういう問題は議員連盟のようなものを作って、国会の場で国策として推進するようしなければダメだ」

その葦原が橋本登美三郎に話を通した。橋本は当時、自由民主党幹事長の要職にあった。

した中山は早速、橋本のもとに向いて、思うところを述べた。

橋本はその意味を理解した。

「倉成先生のところに行つて具体策を作りなさい」

橋本は戦前の朝日新聞で東亜部長を務めた。四五年「日本民党」を結成して四六年の総選挙に出たが落選、四九年に初当選し、以後、吉田茂、佐藤栄作の知遇を得た。

第一次池田内閣で建設相、第一次佐藤内閣で官房長官を務めた。このとき六十七歳である。

こうした経緯から、議連作りの作業は佐藤派の木曜研究会が中心となった。

総裁派閥なので当然ではあったが、ここには人が集まっていた。それを「人数」と読むか「人材」と読むか、あるいは「烏合」と読み替えるかは、受け取る人によって異なる。

初代会長には当初の予定通り橋本登美三郎が就任し、竹下登が事務局長、小渕恵三と中山太郎が事務局次長という布陣である。

ここに桜内義雄、原田憲、秋田大介、倉成正、亀岡高夫、新谷寅三郎、郡祐一、西村尚治、劔木亨弘など衆参両院約百六十人の議員が参加した。

設立総会で橋本は次のように挨拶した。

現在ただいまの時期は、わが国における情報化社会への幕開けの時代である。この時期にしっかりとした対策をとらねば、長期的にみているいろいろな困難な問題に直面するのではないか。

まずハードウェア産業、ソフトウェア産業の強化自立を図ることが第一である。わが国のこの両産業における国際競争力は極めて劣勢であるし、また近い将来、貿易・資本の自由化も避けて通ることはできない。

コンピュータ・システムを駆使して、新しい情報化社会への誤りなき展望を切り拓いていくためには、まずこれらの産業の実力を培養することから始めなければならない。

元新聞記者だけあって文筆が立ち、その草稿には一種の格調さえあった。

三

この政治家は人を感動させる哲学的で拡張高い文章をよく書いた。元新聞記者というだけでなく、思うところがなければ、次のような文章は書けない。

続けて橋本は言った。

私は考える。

コンピュータ時代における人間性の問題である。コンピュータの持つ非情な数理の世界はそれ自体、存立の理由を持つものとはいえ、さらにそれがすぐれて人間的な世界にまで開発されなければならない。

また、このような人間的なものにまで昇華される可能性をコンピュータは持つものであると確信する。その可能性を現実のものとし、総合的なシステムとして新しい社会に役立てるのは、窮極するに人類の叡智である。

この文言の読む限り、橋本登美三郎という政治家は、あの意味でコンピュータの本質を見抜いていた。

ややのちの話だが、ソフトウェア産業振興協会の理事として情報産業振興議員連盟に陳情に行った野崎克己は、

「橋本さんがいちばん理解が早かった。コンピュータやソフトの技術は分からなかっただろうけれど、産業振興のツボは抑えている、という感じだった」

と話している。

ソフト産業の主要な企業に資金をばらまきさえもした。

下條武男が語る。

——東京・恵比寿のマンションに日本コンピュータ・ダイナミクスを設立して間もなく。

いうから、六七年か六八年のこと、「小淵恵三」と名乗る若い国会議員が訪ねてきた。

のちに首相となる小淵はこのときようやく衆院議員としての一步を踏み出したばかり——彼は父光平の後を受けて早大大学院在学中の六三年、二十六歳で群馬三区から立候補して当選した——で、むろん情報産業振興議員連盟はまだ発足していない。

「その小淵さんがね、どこから聞きつけてきたのか、突然、事務所を訪ねて来られましたな。頑張ってください、というんです。それと一緒に、ポンと分厚い封筒を置いていかれたんですわ」

その中には札束が入っていた。

数えると一万円札が百枚。

「もちろん、そんな大金をいただく筋合いはないので、

丁重に御礼と一緒にお戻りました。しかし、まあなんと
いうか、意気に感じた、というか、オレの手でソフト産業
を何とか育てよう、という気持ちだったのか……」

その後ろに橋本がいたことは間違いない。

情報産業振興議員連盟が発足した最初の年の活動記録を
見ると、加盟議員たちは猛烈に勉強した。

「情報産業とは何か」

「政策的課題は何か」

「ユーザーである産業界は何を考えているか」

「行政機関の情報化はどうか」

「ソフトウェア産業の実態はどうなっているか」

——など、とにかくよく学んだ。

会長の橋本登美三郎が率先して会合に出たし、泊り込み
の合宿に参加することもした。他の議員たちもおちおちし
ていられたかった。例えばこの年七月だけで十七回、年間
を通して八十二回の会合が開かれている。

情報産業振興議員連盟が国内情報産業の育成に真剣に取
り組んでいた証拠は、この組織を超党派にしようとしたこ
とである。発足から四か月たった六月二日、東京・溜池交
差点にほど近い赤坂プリンスホテルの「催しもの」一覽に

「国会情報化社会政策懇談会様」

の文字が表示されていた。

橋本登美三郎が顔の広いところを發揮して、野党にも参
加を呼びかけたのだ。社会党から石橋政嗣、大柴滋夫、鈴
木強、民社党から小沢貞田孝、中村時雄、中沢伊登子の六
人が参加した。

橋本は

——野党の参加状態によつては、自民党の議員連盟でな
く、超党派の組織に改変してもいい。

と考えていた。

この構想には伏線があった。

四月十八日に自民党本部内で開かれた産業界代表との懇
談会で、経団連情報処理懇談会委員長・奥村綱雄（野村証
券社長）が

「原子力委員会あるいは宇宙開発委員会などと同じよう
に、『情報産業委員会』という行政委員会をつくつていた
だき、担当大臣をお考え願いたい」

と述べたことだった。

総理大臣の任命で国務大臣を置くことは可能だが、野党
の賛成を得て国策としたい、という考えが橋本にあった。

そのため彼は二回、三回と「超党派」を呼びかけたが、
四回目の会合の場に、社会党の鈴木強ただ一人がぼつねん
と座っているのを見て、ため息をついた。

野党は

——大企業を強化する方策に手を貸す必要はない。それに、自民党の佐藤派が作った議連に、のこのこ参加できるか。

と考えたのだった。

橋本の構想はここで潰えた。

だが、情報化社会の展開を察知した社会党はほどなくして、党内政策審議委員会に「情報化対策特別委員会」を設置している。委員長は多賀谷真稔、副委員長は鈴木強だった。鈴木が強くその必要性を訴えたのである。

補注

簸川郡 ひかわ・ぐん「斐川」とも。古代に「出雲」と呼ばれた政治勢力の本貫地とされる。一九八四年に荒神谷というところに道路を通す工事のための予備調査のとき地中に金属反応があった。以前から土器や鉄の破片が出土していたことから、古代の製鉄工房が埋まっているという想定のもとで発掘が始まった。出てきたのは一定方向にそろって箱に収められた大量の青銅の剣と多数の銅鐸だった。銅剣は三つのブロックに分かれ、計三百六十八本が発見されている。この数は全国の遺跡から出土した銅剣の総数を上回り、古代王権の存在が示された。

竹下 登 たけした・のぼる／1924～2000。島根県掛合(かけや)町の造酒屋の長男として生まれた。父は元県議だったので、早くから政治家を志した。四六年早稲田大学商学部を出て地元で中学校代用教員を務めたのち島根県議を経て五八年島根全県区から衆院議員に当選した。七一年佐藤内閣の官房長官に抜擢され、田中内閣で再び官房長官、三木内閣で建設相、大平内閣で蔵相、中曽根内閣で四期連続して蔵相。田中角栄の懐刀として頭角を現わし、八五年二月田中角栄が病に倒れると「創政会」を結成し、八七年七月に「経世会(竹下派)」として正式に独立した。同年十一月首相に就任したが八九年「リクルート疑惑」で総辞職に追い込まれた。以後、党内最大派閥の領袖としてフィクサー的な役割を果たした。竹下七奉行といわれた小淵恵三、橋本龍太郎、小沢一郎、羽田孜、梶山静六、奥田敬和、渡辺恒三のうち三人がのちに首相となった。

亀岡高夫 かめおか・たかお／1920～1989。福島県に生まれ一九四〇年陸軍士官学校を出てガダルカナル戦線、インパール作戦に従軍した。終戦時少佐。六〇年の総選挙で衆院議員となり、七三年田中内閣で建設相、鈴木内閣で農水相。農水相のとき種子問題の重要性に気づき日中品種改良共同研究予算を計上した。八九年昭和天皇の葬儀「大葬の礼」に参列していたとき倒れた。

小淵恵三 おぶち・けいぞう／1937～2000。群馬県に生まれ一九六二年早稲田大学を出て同大学大学院在籍中の六三年衆院議員だった父・光平の跡を継いで衆院議員となった。七九年大平内閣で総理府総務長官兼沖繩開発庁長官、八七年竹下内閣で官房長官となり、新元号「平成」を発表した。九四年自民党副総裁、九七年第二次改造橋本内閣で外相、九八年自民党総裁選で梶山静六を破って当選し首相となった。韓国の金大中大統領と会談し日韓関係の改善に努めたが、二〇〇〇年四月脳梗塞で死去した。

中山太郎 なかやま・たろう／1924～2023。大阪府豊中市に生まれ五二年旧制大阪高等医学専門学校(のち大阪医科大学)を出て大阪医科大学小児科教室助手となった。五五年大阪府議会議員となり六一年に医学博士号を取得、六八年参院議員となり七一年労働政務次官、八〇年総理府総務長官・沖繩開発庁長官、八三年参議院自民党幹事長、八六年衆院議員に転じ八九年第一次・第二次海部内閣で外相となった。九七年勲一等旭日大授章を受けた。

第八回参院選 争点は物価問題と安保・基地問題だった。選挙結果は自民六九、社会二八、公明二三、民社七、共産四、無所属五。社会党の後退と公・民・共三党の増加によって野党の多党化、自民党の国会支配が進んだ。石原慎太郎、青島幸男、今東光、大松

博文、横山ノックなどいわゆるタレント候補が大量に得票し、参院全国区のあり方に問題をなげかけた。

黒部第四ダム 富山県黒部川上流の黒部溪谷には戦前の一九三七年から水力ダムの建設が行われ、五五年までに三つのダムと水力発電所ができていた。都市部の電力消費が急増した五六年、関西電力はその上流に第四ダムを建設することを決めたが、現場は富山、岐阜、長野の三県にまたがる急峻な山岳地帯(中央アルプス立山連峰)で、富山県側からの着工が困難だった。そこで建設資材を搬送するため長野県大町側からトンネルを通し、さらに搬送用ケーブル、トロココなどを敷設した。これが「黒部立山アルペントール」として観光用に使われている。工事着工から七年後の六三年六月、アーチ式ドーム越流型、堤長四百九十二メートル(日本最大)、高さ百八十六メートルのダムが完成し、ダムの下流十キロに建設された発電所で毎時十万千瓦が関西地方に送られるようになった。総工費は五百十三億円、延人員一千万人が投入された。映画『黒部の太陽』でも知られる。

美浜原子力発電所 関西電力が近畿地方の電力需要に対応して、若狭湾に臨む美浜に建設した初めての原子力発電所で、一号機は七〇年十一月に本稼動した。大阪万博の電力をまかなったことで知られる。次いで七二年七月に二号機、七六年十二月に三号機が完成、総発電能力は一千六百六十六メガワット。九一年二月、二〇〇三年五月に二号機が、二〇〇四年八月に三号機が冷却水漏れなどの事故を起こし、〇四年の三号機の事故では放射能被爆による死者一名を出した。

倉成 正 くらなり・ただし／1918～1996。長崎県に生まれ、父は戦前の衆院議員、伯父・西岡竹次郎は長崎県知事。自

由民主党所属の衆院議員として十二期三十五年を務めた。経済企画庁長官、外相などを歴任、情報産業振興議員連盟会長でもあった。九三年勲一等旭日大綬章した。

石橋政嗣 いしばし・まさし／1924～2019。台湾・台北市で生まれ一九四四年台北経済専門学校を出て終戦後は佐世保のアメリカ軍基地に労務者として雇用された。四七年全国駐留軍労働組合の佐世保支部結成とともに書記長となった。のち長崎県議、同県評議員を経て、五五年左派社会党所属の衆院議員となった。

佐々木更三(ささき・こうぞう／1900～1985)と江田三郎(えだ・さぶろう／1907～1977)の派閥抗争が激化すると勝間田清一(かつまた・せいいち／1908～1989)を推して委員長として党内パワーバランスを保った。成田知巳(なりた・ともみ／1912～1979)委員長の時書記長となった。以後、実質的に社会党を代表する存在として「非武装中立」論を展開した。八三年飛鳥田一雄(あすかた・いちを／1915～1990)の退陣を受けて第九代委員長に就任したが八六年の衆参同日選挙に大敗して辞任し、九〇年政界を引退した。

奥村綱雄 おくむら・つなお／1903～1972。証券取引業務の近代化に力を注ぎ、特に一九六一年に首相・池田勇人の個人特使として米欧の金融・証券システムを視察したことが、コンピュータ推進を決意させたといわれる。

鈴木 強 すずき・つよし／1914～1995。山梨県に生まれ、一九三九年通信官吏練習所無線科を出て通信省に入った。のち電気通信省事務官、日本電信電話公社社員を経て全通通書記長、同委員長を務め、五六年の第四回参議院議員通常選挙で全国区から日本社会党公認で立候補して当選した。七四年の第十回参議院

議員通常選挙で落選したが、七六年の第三十四回衆議院議員総選挙で当選した。八六年に引退し同年秋勲一等瑞宝章を受けた。

日本IT書紀 166 議員連盟

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。